

新出 義寂撰『無量寿経述記』 写本の検討

南宏信 (国際仏教学大学院大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究員)

はじめに

2009年秋に山梨県に在る身延文庫が蔵する浄土教関係の聖教を閲覧・調査をさせて頂いた。その中の一書に「無量寿経述記卷第一」と題する『無量寿経』の末疏があり、内容を確認した結果、結論から言えば新羅僧義寂（7世紀）の『無量寿経述（義）記』と一致することが判明した。

『無量寿経述（義）記』は、諸目録で採録されているが現存本は今まで確認されておらず、かつて春日礼智氏や恵谷隆戒氏が源隆国（1004～1077）『安養集¹⁾』や了慧道光（1243～1330）『無量寿経鈔²⁾』等に引用される逸文から蒐

1) 梯信曉著『宇治大納言源隆国編安養集 本文と研究』（百華苑、1993年）

2) 『浄土宗全書』14卷所収。

集した「復元本³⁾」があるのみである。従って『無量寿経述(義)記』の思想内容を垣間見るには、これまで「復元本」に依る他無かった。

了慧『無量寿経鈔』は、『無量寿経』本文を細かく分けて逐語解釈を施す形式を採っているので、義寂の引用箇所についても『無量寿経』のどの箇所を解釈しているかが分かる。恵谷氏はそれに依り、上中下に分け、『無量寿経述(義)記』全体の内、凡そ3分の2の分量が復元出来たと言う。その「恵谷復元本」の大部分を占めるのが中巻である。それについて恵谷氏は、中巻は完全に近いほど復元出来たが、上下両巻の復元が不完全であると言う⁴⁾。

そして本稿では「恵谷復元本」では不十分であった上巻の大部分を身延文庫蔵の現存本に依って、より復元を充実させることが可能となった。これは義寂の浄土思想を考察する上で貴重なものである。以下に身延文庫本を紹介し、続いてそれと「恵谷復元本」とを比較し、身延文庫本が確かに義寂の『無量寿経述(義)記』であることを確定したい。また部分的ではあるがこの作業を通して、従来叶わなかった現存本を用いて「恵谷復元本」を検討する事や、了慧『無量寿経鈔』の『無量寿経述(義)記』引用の形式的態度を確認することが可能となった。

身延文庫蔵『無量寿経述記』巻一

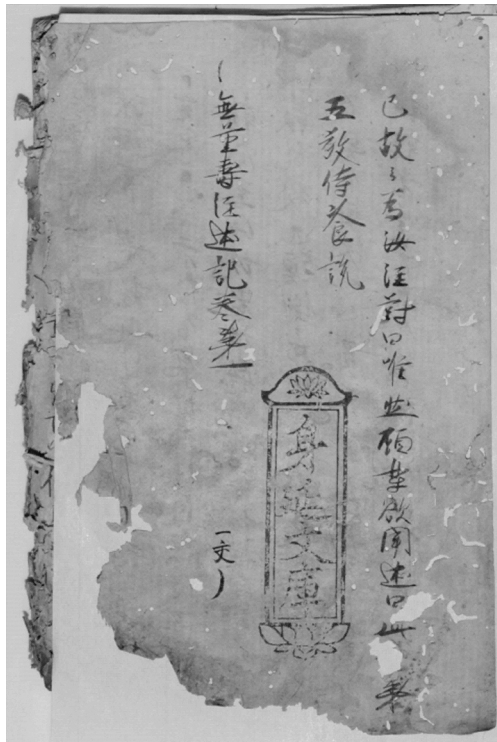
書誌データは以下の通り⁵⁾。整理番号：諸宗部・余宗、24・2-2。粘葉装。楮

3) 春日礼智編(新羅積) 義寂撰『無量寿経述義記』(真宗学研究所、1940年)。恵谷隆戒著『浄土教の新研究』(山喜房仏書林、1976年)。本稿では、恵谷氏が、春日氏の復元本に修正を加えた復元本を使用した。以下「恵谷復元本」と呼称する。

4) 恵谷隆戒稿「新羅義寂の無量寿経述義記について」(前掲恵谷著93頁～)。

5) 法量は『身延文庫典籍目録 下』(身延文庫典籍目録編纂委員会編集、2005年)を参照。

紙。押界。縦23・0cm、横15・1cm。7行17～20字。白文。虫損等で判読できない箇所有り。尾題下に「身延文庫」の所蔵印（黒印）有り。外題・内題・撰者：前部欠の為に確認できず。尾題：「無量寿経述記卷第一」。残存41丁。装丁・字様等から平安後期の写本と思われる（【資料1】参照）。



身延文庫本末尾

書名・卷数について

● 諸目録に見る書名 ※ [] 内は割注

○ 『正倉院文書』⁶⁾

- (1) 天平勝宝4年(750) 8月30日の「五年三月十四日充春日虫万呂 / 合卅一卷 用紙一十七張」に「**無量壽經述記一卷**⁷⁾」とある。
- (2) 天平宝字7年(763) 7月1日の「大師[惠美押勝] 家牒[正倉院文書] / (續々修[三帙十裏]) / 大師家牒 東大寺三綱務所 / 合應清疏三百八十二卷」に「「*諸」**無量壽經述記一卷***^{十五}⁸⁾」とある。
- (3) 天平宝字7年(763) 7月5日の「奉寫經所請疏文案[正倉院文書] / (續々修[三帙十裏]) / 「*奈良 合令疏老百陸拾卷[之中四卷黄紙及表无帶^梨軸 十卷黄紙及表綺帶梨軸百五十二卷白紙黄表 綺帶梨軸 宮一切經内之]」に「**無量壽經述記一卷**⁹⁾」とある。
- (4) 神護景雲元年(765) 9月26日の「「*「可」 造東大寺司移奉寫一切^經司 / 合疏七十九卷[帙十枚 牙籤四枚並坤宮]」に「**無量壽經述記一卷**¹⁰⁾」とある。

○ 『阿弥陀仏經論並章疏目録』¹¹⁾ 承暦元年(1077年写)

「無量壽經述義記三卷¹²⁾ ^(國)寂法師集」(第四十四^甲)

6) 木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(国書刊行会、1989年)に依る。

7) 『大日本古文書』12巻359頁。

8) 『大日本古文書』16巻402頁。

9) 『大日本古文書』16巻416頁。

10) 『大日本古文書』17巻94頁。

11) 国文学研究資料館編『真福寺古目録集』(『真福寺善本叢刊』第二期) 1巻530頁(臨川書店、1999年)。落合俊典稿「真福寺藏承暦元年写『阿弥陀仏經論並章疏目録』について」(『仏教文化研究』47・48、2003年)参照。

- 『一切經論律章疏集 (伝録) 並私記卷上』(平安末期書写)
「無量壽經疏三卷 義寂¹²⁾」
「無量壽經義述一卷¹³⁾」
- 『大小乘經律論疏記目錄』(平安時代前期書写)
「無量壽經述記一卷 十三紙¹⁴⁾」
「無量壽經述義三卷 寂師 百八十一紙¹⁵⁾」
- 『古聖教目錄』(擬題、1175年～1180年書写)
「無量壽 上中下 述義 義寂
無量壽經述記 上中下 寂集¹⁶⁾」
- 『高山寺聖教目錄¹⁷⁾』建長二年(1250年成立)
「^(朱)雙^(寂造)觀經述義記三卷」(第四四^甲)
- 『東域伝灯目錄』(永超、1094年成立)

12) 牧田亮諦監修・落合俊典編『七寺古逸經典研究叢書第六卷 中国・日本經典章疏目錄』(大東出版社、2000年) 281頁。宮崎健司稿「『一切經論律章疏集 (伝録) 並私記』 卷上解題」(同本) 参照。

13) 前掲『日本經典章疏目錄』300頁。

14) 前掲『日本經典章疏目錄』340頁。梶浦晋稿「法金剛院藏『大小乘經律論疏記目錄』について」(同本) 参照。

15) 前掲『日本經典章疏目錄』340頁。

16) 前掲『日本經典章疏目錄』208頁。落合俊典稿「『古聖教目錄』(擬題) 解題」(同本) を参照。

17) 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺經藏古目錄』(『高山寺資料叢書』第十四冊、東京大学出版会、1985年)。

大夫殿目錄云觀無量壽經述記三卷二部

「同經疏三卷 義寂 寂法師可勘會之同經疏合□師¹⁸⁾」

- 『浄土依憑經論章疏目錄¹⁹⁾』(以下『長西錄』、13世紀中頃成立)
「同經述義記三卷^{百卅丁} 義寂^{法相宗}」(10ウ)
- 『三寶院經藏目錄²⁰⁾』(「三寶院經藏頭教聖教目錄」)慶長九年(1604年)写
「同經疏三卷[寂法師法相]」(21才)

●その他の書名

- 了慧撰『無量壽經鈔』に見る呼称→「義寂云」「寂云」「寂公」
- 東向観音寺蔵『往生要集鈔²¹⁾』に見る呼称→如導写(1284~1357)の筆で本文「雙卷述記云～」の右横に「寂寂也三卷書也」とある。

書名について、『正倉院文書』では「無量壽經述記」の書名を4箇所確認できるが、作者の記述がないので義寂の『無量壽經』の註釈書であるかどうかは確定できない。他の諸目録では「無量壽經述記」「無量壽經述義」「無量壽經疏」「無量壽經述義記」が確認できる。これらはいずれも義寂の名も合わせて表記している。

身延文庫本と東向観音寺本(共に鎌倉期)は「述記」を使用している。亦

18) 高山寺典籍文書綜合調査団編『高山寺本東域伝灯目録』(『高山寺資料叢書』第十九冊、1999年、東京大学出版会) 49頁・186頁。『大正蔵』55巻1150頁下段6行。

19) 小山正文稿「寛永二十一年本『浄土依憑經論章疏目錄』」(『同朋大学論叢』62号、1990年)。

20) 小原仁稿「『三寶院經藏目錄』(一)」(『研究紀要』20、醍醐寺文化財研究所、2005年)。

21) 正和三年(1314)写、巻第3(18丁裏)

『無量壽經鈔』は、「義寂云」「寂云」「寂公」を使用しており、書名を挙げている訳ではない。

これらを見るに、確認出来た書名の嚆矢は「述記」であるが、これを義寂の書とするかどうかは確定できない。平安期には既に「述記」「述義記」「述義」「疏」を混用している。従って正式名称がどの名称であったかを確定的に判断することは困難である。しかし唯一現存する身延文庫本が「述記」を有するので、「無量壽經述記」の名が伝写されていたことはまず確実であると言え、義寂には『法華論述記』と題する著作も現存していることから、古態は「述記」であったろうと思うが、推論の域を出るものではない。

巻数について、確認出来るものは、1巻本と3巻本である。『正倉院文書』の「一卷」は、恐らく卷子本である為に1巻と記載されているのであろうが、(2)の場合「十五」と紙数が記載されているが、身延文庫本と比べてかなり少ない。『大小乗經律論疏記目録』記載の「無量壽經述記一卷 十三紙」は『正倉院文書』記載(2)と同本であろうか。同目録では別に「無量壽經述義三卷 寂師百八十一紙」とするので紙数からしても1巻本は義寂の著作とは別本であろう。

亦3巻構成の場合は通常「上中下」を使用するが、身延文庫本は「巻第一」と記載する。身延文庫本は第1巻のみの現存であるので、何巻構成であったかは知り得ないが、「恵谷復元本」と対照させることによってある程度の推測を立てることが出来る。

身延文庫本の巻数

身延文庫本は粘葉装である為、現存箇所冒頭の糊付け部に「二十六」の丁付けが確認できる。前部二五葉、つまり50丁が欠損している。そして現存部

分の41丁を足すと、1巻全体は91丁であったことが推測できる。7行18字として、総字数は22932字となる。これが推測する身延文庫本第一巻の全体像である。

一方「恵谷復元本」は「上中下三巻は大体完全に近いほど復元出来たわけであるけれども、上下両巻の復元が不十分である²²⁾」と言う。これに依ると中巻の殆どは復元出来ていることになる。その「恵谷復元本」中巻の総字数は約19000字である。



(左)『無量寿経述記』冒頭部(右)拡大部

あくまで目安だが、これに依ると「恵谷復元本」は約16丁少ないが、『無量寿経』の注釈箇所から勘案して3巻構成を超える程の差ではないだろう。身延文庫本に依り、かつ3巻構成であるとすれば、総量は約270丁程度(約69000字)だろうか²³⁾。

22) 恵谷隆戒稿「新羅義寂の無量寿経述義記について」(前掲恵谷著九三頁～)。

23) 『長西録』は130丁と記載するが、『長西録』が披閲した『無量寿経述義記』が現存していないので確認することは出来ない。試しに69000字を130丁で割ると半丁150字となる。半丁7行とす

身延文庫本と「復元本」の比較

經典の末疏を繙く場合、科段によって全体構成を見るのが通例であるが、「恵谷復元本」は逸文の蒐集である為に分からない。一方身延文庫本第一巻の場合は断簡ではあるが、一部の構成を知ることができる。それは【資料2】の通りである。

身延文庫本は引用經典の明記の有無に関わらず、『修行本起経』『普曜経』『華嚴経』『涅槃経』『文殊師利問経』『大智度論』を引用し、玄奘訳では『阿毘達磨順正理論』、特に『瑜伽師地論』を多用し解釈していることが分かる。

義寂について、望月信亨氏は

義寂は義湘の門人であって、悟眞、智通等と共に門下十徳の一に數へられるのである。三國遺事第四「義湘傳教」の下に「徒弟悟眞、智通、表訓、眞定、眞藏、道融、良圓、相源、能仁、義寂等十大徳爲二領首一。皆亞聖也。各有レ傳。」と記してゐるのがそれである。(中略) されば義寂も武周代に康存し、憬興等と同時代であつたことを知るべきである²⁴⁾。(太字筆者)

と述べる通り、新羅華嚴宗の祖とされる義湘(625~702)の門人である。又富貴原章信氏は

義寂は入唐して玄奘に學び、唯識未詳決を著し、慈恩、西明等と共に唯識六家の一人に數へられ、道證の要集序(増明記引)によれば、汾陽の(義)寂は穿鑿

ると1行は21字、8行すると18字になる。また『大小乗経律論疏記目錄』は3巻181紙とある。これを卷子本で換算すると1巻60紙となり、明らかに1巻あたりの紙数が多すぎる。冊子本で1紙1丁とすると、『長西録』の記す130丁と大体同様である。

24) 望月信亨稿「新羅義寂の著書并に『無量寿経疏』」「浄土学」21、1946年。

に由て知を見るといひ、謂ゆる未詳寂法師とされる人である²⁵⁾。(太字筆者)

とるように、玄奘にも師事している²⁶⁾。

このような義寂の教学形成の上で、『華嚴經』や玄奘訳の論書に依拠しつつ『無量寿經』を解釈している事が分かる。

さて身延文庫本と「恵谷復元本」との対応箇所は【資料3】の通りである。(1) から (10) は身延文庫本が欠損の為に対応箇所を確認できない。(1) は『安養集』からの引用であるが、確認したところ、前部が欠けていることが分かったので、【資料3】では補って示した。(19) も『安養集』からの引用であるが、身延文庫本に対応箇所がみられないのでこの箇所は中巻に該当するのかもしれない。

今回確認できた対応箇所は (11) から (18) である。以下検討していく。

- ・「恵谷復元本」と対応する身延文庫本の箇所に傍線を付した。
- ・虫損等で判読不可能な場合は空格(□・[])を付し、予想できる場合(～カ)として補った。
- ・割註は〈 〉で表記した。
- ・便宜上「恵谷文庫本」の返り点等は省略した。詳細は【資料3】を参照されたい。

(11) 端座樹下勤苦六年

[身延文庫本]

是菩薩坐沙羅樹下便為一切志求無上正真 [] 道諸天奉甘露一不肯受自

25) 富貴原章信著『日本唯識思想史』73頁～(大雅堂、1944年)

26) 『長西録』や『三寶院經藏目錄』でも法相の僧としている。

誓食一麻一米以続精気端坐六年形骸羸瘦皮骨相連玄清 [] 漠寂黙一心内思
 安般数随止観還淨極志 [] 出十二門是謂端坐樹下懃若六年行如所 [] 不同
 外道耶若行故々經中云有十事故示現□ (苦力) 行所謂欲教化成就小心衆
 生故為拔着邪見衆生故為無業報邪見衆生欲令知業報後 [] □ (為力) 隨
 順五濁世界衆生欲為懈怠衆生故為令 [] 衆生欲求法故為着欲示衆生故
 為顯菩薩□ (殊力) [] 勝行故欲令未來衆生發精進故諸天世人 [] 根
 未熟侍時熟故此若行 (事力) 一切諸仏未必□□ (有之力) 如弥勒即出家夜
 成道故無六年苦行故八□ (相力) 中有不別立 (仮3才3行～)

〔惠谷復元本〕

於是菩薩坐沙羅樹下 〈乃至〉 諸天奉甘露一不肯受、自誓食一麻一米以続精
 気端座六年 (中略) 此苦行事一切諸仏未必有之、如弥勒即出家夜成道、故
 無六年苦行、故八相中有不別立、(大經鈔一)

「惠谷復元本」の「(中略)」は本文ではなく、惠谷氏の挿入である。この
 文章は、『無量寿經鈔』からの引用であり、二箇所引用を合わせたもので
 ある。この対照に依って了慧が全体のどの箇所を選択して引用していたか
 が分かる。

(12) 現五濁刹隨順群生

〔身延文庫本〕

問何時是濁世、何時非濁世、何時是濁増、何時非濁増。答人寿千歳已還是
 名濁世、千歳已上名非濁世、百歳已還是名濁増、百歳已上名非濁増。故
 『文殊問經』云「云何命濁十歳衆生乃至千歳有長短故唯²⁷⁾」此千歳已前非

27) 梁迦婆羅訳『文殊師利問經』卷上 (雜問品第十六) 「云何命濁。十歳衆生。二十三十四十

濁世也。百歲已上仏世以後不出。故知百歲已下是濁増以上非増也 (仮6才3行目～)

[惠谷復元本]

人壽千歲已還是名濁世、千歲已上名非濁世、百歲已還名濁増、故文殊問經云云何命濁十歲衆生乃至千歲有長短、故準此千歲已前非濁世也、百歲已上仏出世已後不出、故知百歲已下是濁増已上非濁増 (大經鈔一、拾遺抄上)

この箇所は元々問答形式であった。その文章の回答のみを引用している。

(13) 吉祥感徴表章功祚

[身延文庫本]

「吉祥感徴表章功祚」者「於是菩薩心自念言、諸過去仏為在何坐得成無上正真道乎。復更念言、過去諸仏坐於草蓐成最正覺虛空諸天觀菩薩心即時報言如大聖教過去如來皆坐草蓐成最正覺於時菩薩見路右邊有一人名曰吉祥、又生青草柔軟滑沢整齊不亂好若天衣時菩薩見、即便越道詣吉祥所以慈和心與共談語而謂之言²⁸⁾」「吾欲得草吉祥與我今日欲得當伏邪力成無上覺²⁹⁾」吉祥聞説結和之辭歡喜踊躍奉柔軟□ (草力) (仮10才4行～)

五十六七十八九十歳百歳。二百歳四百歳八百歳。乃至千歳有長短故。」(『大正蔵』14巻503頁下段1行～)。

- 28) 西晋月氏竺法護訳『普曜経』五巻(迦林龍品第十六)「佛告比丘。於是菩薩心自念言諸過去佛。爲在何坐得成無上正眞之道爲正覺乎。復更念言。過去諸佛坐於草蓐成最正覺。虛空之中無數百千天。觀菩薩心即時報言。如大聖意過去如是。皆坐草蓐成最正覺。佛語比丘。於時菩薩見路右邊。有一人名曰吉祥。刈生青草柔軟滑澤。整齊不亂好若天衣。時菩薩見。即便越道詣吉祥所。以慈和心與共談語。而謂之言。」(『大正蔵』3巻514頁下段12行～)。便宜上、訓点・脚注は省略した。

- 29) 西晋月氏竺法護訳『普曜経』5巻(迦林龍品第十六)「吾欲得草吉祥與我。今日欲得。當伏

〔恵谷復元本〕

菩薩自念言、過去諸仏坐於草蓐成最正覺、乃至於時菩薩見路右辺、有一人名曰吉祥、菩薩詣吉祥所謂之言、吾欲得草吉祥与我、吉祥歡喜奉柔輦草、(拾遺抄中)

『無量寿經』の「吉祥感徴表章功祚」を註釈する箇所であるが、この箇所は『普曜經』を引用している。それをそのまま了慧が引用している。

(14) 使魔知之魔率官属

〔身延文庫本〕

又降魔事一切菩薩不必皆有如弥勒等无降魔事因宿世中行因有異今時他宜亦有差別故不同也 (仮16才5行～)

〔恵谷復元本〕

又降魔事一切菩薩不必皆有、如弥勒等無降魔事、因宿世中行因有異、爾時化宜亦有差別故不同也、(大經鈔一)

省略や孫引き等もなく、忠実に引用している例といえる。

(15) 貫綜縷練所住安諦

〔身延文庫本〕

「貫綜」者別合縁起多聞、「縷練」者別顯法相多聞、「貫」者通也、「綜」者括也、諸法雖衆縁起無差通括此理故云「貫綜」「縷」者委也、「練」者精也 (仮27才6行～)

邪力成無上覺。」(『大正藏』3卷514頁下段28行～)。便宜上、訓点は省略した。

[惠谷復元本]

貫者通也、綜者括也、縷者委也、練者精也、淨影云綜習也、(大經鈔二)

『無量壽經鈔』は

貫綜等者憬興云、貫通也。綜集也。縷詮也。練陶也。即通穿群典集括事
理詮表玄旨陶委衆疑。義寂云、貫者通也。綜者括也。縷者委也。練者精
也。淨影云、綜習〈已上〉³⁰⁾ (訓点省略)

としているが、「淨影云綜習也」は身延文庫本には無い。「惠谷復元本」の他
所にも「淨影云」いう箇所は確認出来ない。これは「～淨影云、綜習〈已上〉」
の「已上」の記述により、義寂の引用として蒐集したのであろう。しかしこ
れは前の憬興からの引用を含むものであるので、義寂が憬興を引用してい
るとは言えない。以上のことからこの憬興の箇所は削除するのが妥当であ
ろう。

(16) 諸根悦予姿色清淨

[身延文庫本]

將欲宣說□(奇力) 特之法是故先現非常相也 (仮36丁ウ6行～)

[惠谷復元本]

將欲宣說奇特之法、是故先現非常相也、(大經鈔二)

30) 『浄土宗全書』14巻37頁上段10行～。現存最古の元亨2年(1322年)書写本(龍谷大学蔵本)も
同文である。

(17) 承仏聖旨

〔身延文庫本〕

「偏袒右肩」者整服以顯懇誠（仮37丁3行～）

〔恵谷復元本〕

整服以顯懇誠、（大経鈔二）

(16) (17) も忠実引用している例である。

(18) 唯然大聖我心念言

〔身延文庫本〕

「今日世尊住奇特法」者即是第一妙色功德相好莊嚴世無倫。故即由此德名為世尊。「今日世雄住仏所住」者即是第二寂靜功德密護根門永拔或習唯仏独得住此法。故即由此德名為世雄。「今日世眼住導師行」者即是第三勝智功德知世非世法能導衆人。故即由此德名為世眼。「今日世尊住最勝道」者即是第四正行功德利樂自他行最為勝通。故即由此德名為世尊。「今日天尊行如来徳」者即是第五威徳神通遊戲名如来徳。即由此德名為天尊。（仮38才3行～）

〔恵谷復元本〕

第一妙色功德相好無倫、第二寂靜功德護根拔惑、第三勝者智功德知世非世、第四正行功德利自他行、第五威徳功德神通遊戲、以此等義各得仏名、（大経鈔二）

「恵谷復元本」は題目のみを列挙するのみであるが、身延文庫本は——にその内容について解説している。

おわりに

以上、身延文庫本を「恵谷復元本」と対比しながら検討を加えた。これにより身延文庫本が義寂の『無量寿経述記』であることが確実のものとなった。一方で「恵谷復元本」を微調整でき、了慧『無量寿経鈔』の『無量寿経述記』引用の形式的態度が確認できた。かつて恵谷氏は復元本作成に当たり、

後学の士によって、更に広く諸書に引用する義寂の文を集大成して頂くならば、完全に近い復元本が出来るものと思われるので、その点後学の士に期待する次第である。

と結ぶ。今回、第1巻の断簡のみだが『無量寿経述記』が現存しており、それを世に紹介出来たことで多少なりとも先学の遺志を繋ぐことが出来たかと思う。これも「復元本」という先蹤があればこそ為し得たことである。ある文献を繙く場合、あらかじめその文献の整理・検討が成されていなければならない事は言うまでもない。しかし新出文献や新知見を得る毎にその成果は更新されていくという意味に於いては、程度の差こそあれ、文献は全く固定化されたものではなく、常に新しい文献へと開かれていると言える。身延文庫本の場合もそのような特徴を有しており、義寂の教学的な特徴や新羅浄土思想を考察する上での一助となろう。本稿では身延文庫本の紹介に主眼を置いたが、今後の課題は、身延文庫本の翻刻の完成やそれに基づいた「恵谷復元本」の内容を更に検討することである。

【日本における先行研究】

- 2009年 崔 桐洵 「新羅義寂の著述を通してみる古代韓日佛教交流とその意義」(『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究紀要』9)
- 2008年 高平妙心 「『法華経集験記』に関する一考察」(『印度學佛敎學研究』56(2))
- 2008年 尹 鍾甲 「新羅仏教の生死観と生命倫理：義寂の殺生無罪論と太賢の由食至殺論を中心に」(『印度學佛敎學研究』56(2))
- 2007年 戸次顕彰 「『梵網経』諸注釈書における持犯の一考察：殺戒を中心として」(『印度學佛敎學研究』56(1))
- 2003年 李 種林 「新羅義寂の三定聚について」(『印度學佛敎學研究』51(2))
- 2003年 師 茂樹 「Criticism of the Hosso Theory in Girin Quoted by Saicho: Especially with Relation to Wonhyo and Uijok」(『印度學佛敎學研究』51(2))
- 2002年 石井 義長 「具足十念と一念往生：平安浄土教における新羅浄土教受容の一側面」(『印度學佛敎學研究』51(2))
- 2000年 李 種林 「義寂の浄土思想における身土観について」(『印度學佛敎學研究』48(2))
- 1995年 前川健一 「円珍『法華論記』の引用文献：未詳文献の解明を中心に」(『インド哲学仏敎学研究』3)
- 1995年 重森敬光 「新羅の義寂の古逸書『大乘義林章』に関する一考察：日本法相・天台両宗の引用態度について」(『龍谷大学佛敎学研究室年報』8)
- 1989年 梯 信暁 「新羅義寂『無量寿経述義記』の一考察：世親『浄土論』

の位置付けについて」(『印度學佛敎學研究』38(1))

1966年 松林弘之 「朝鮮浄土敎の於ける憬興・義寂の一考察」(『仏敎学
研究』22)

1958年 恵谷隆戒 「義寂の無量寿経述義記について」(『佛敎大学研究紀
要』35)

1946年 望月信亨 「新羅義寂の著書并に『無量寿経疏』」(『浄土学』21)

1940年 辻 賢哲 「螺溪義寂尊者考察の一二」(『新山家学报』新13)

キーワード

無量寿経、義寂、無量寿経述記、身延文庫、恵谷隆戒、新羅、浄土敎

【資料1】身延文庫本（仮3丁裏〜4丁表）



・傍線部は「恵谷復元本」(11)の対応箇所。

- 1 不同外道邪若行故々經中云有十事故示現□
- 2 行所謂欲教化成就小心衆生故為拔着邪見
- 3 衆生故為無業報邪見衆生欲令知業報後(一)
- 4 □ 隨順五濁世界衆生欲為懈怠衆生故為令(一)
- 5 衆生欲求法故為着欲示衆生故為顯菩薩□(一)
- 6 勝行故欲令未來衆生發精進故諸天世人(一)
- 7 根未熟時熟故此若行□一切諸仏未必□□

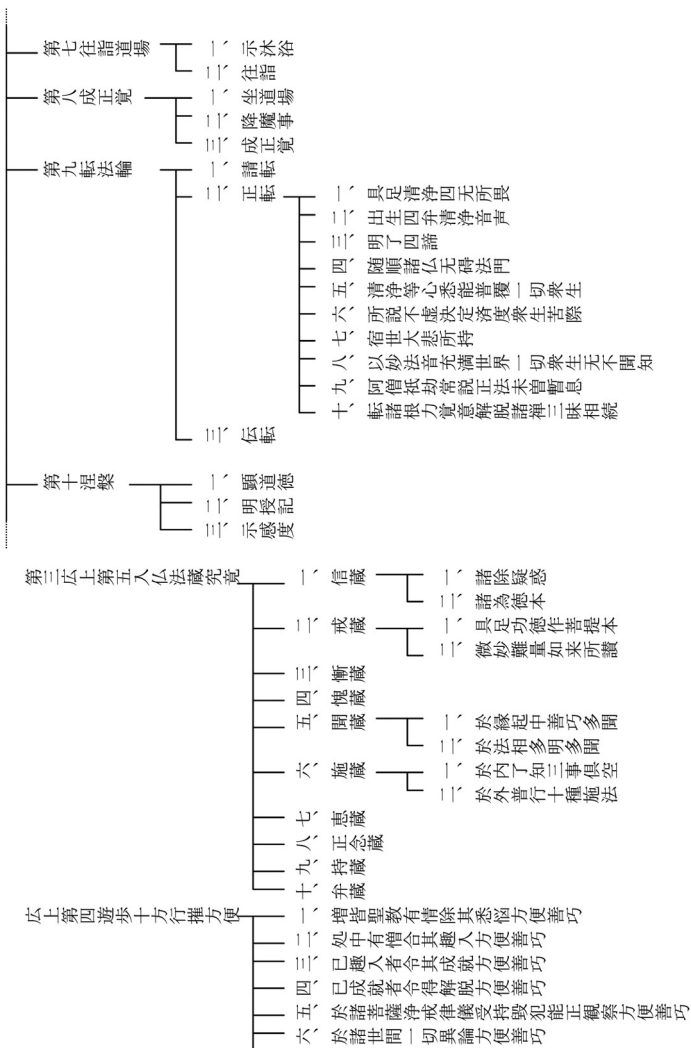
「(仮3ウ)

- 1 如弥勒即出家夜成道故無六年苦行故八□
- 2 中有不別立經「現五濁利」乃至「往詣道場」□
- 3 曰此即第七往詣道場於中有二一示沐浴二二
- 4 往詣「現五濁利隨順衆生」者義儼兩意属
- 5 上顯示行若行意属下顯示浴塵垢意言「五
- 6 濁」者如『瑜伽論』卅四云「又諸菩薩如實了知有
- 7 情世間有諸穢濁濁世增時無諸穢濁濁世減時

「(仮4才)

【資料 2】

身延文庫藏『無量壽經述記』卷第一 科段



如来現相開發	一、如来現相
	二、阿難申問
	三、當彼所問
	四、願已能答
	五、敬侍峻說
広上第 ⁽¹⁸⁾ 普賢大士之徳	一、不捨一切衆生
	二、於諸華嚴生如來想
	三、常不誹謗一切仏法
	四、於諸仏刹得無尽智
	五、教化衆生心無疲厭
	六、恭敬信樂菩薩所行
	七、荷虛空法界等菩提三心
	八、別華嚴究竟仏力到於彼岸
	九、修習華嚴一切諸辦
	十、於一切世界示()而不來着
広上第五具諸菩薩無量行願	一、濟諸閻闍離行願
	二、諸閻闍行願
	三、分別顯示實際行願
	四、得諸如來非智行願
	五、入衆言音行願
	六、開花一切行願
	七、超過世法行願
	八、常住度世行願
	九、於法自在行願
	十、於衆攝取行願
広上第四安住一切功德之法	一、不起不滅功德
	二、得法平等功德
	三、具足成就愍持功德
	四、百千三昧功德
	五、諸根智慧功德
	六、広菩薩定功德
	七、深入菩薩法藏功德
	八、得仏華嚴三昧功德
	九、宣揚演說功德
	十、普見諸仏功德
	十一、九於獨覺乘方便善巧
	十二、其太乘善巧方便
	十三、於諸正願善巧
	十四、於声聞乘方便善巧
	十五、九於獨覺乘方便善巧

【資料 3】『惠谷復元本』(上卷)

- ・惠谷隆戒著『浄土教の新研究』(一九七六年)所収本を使用した。
- ・復元本では確認できないが、『安養集』に依り追加した箇所は波線(〰)を引いた。
- ・身延文庫本と対応関係にある箇所は傍線(〰)を引いた。
- ・便宜上、通し番号を付した。

無量壽經述義記復元本卷上

新羅義寂撰

(一) 部黨不同者。說西方淨土經。部黨多種。一兩卷無量壽經。之此所說也。一觀無量壽。三阿彌陀經。日鼓音陀羅尼經。初兩卷經本亦多種。第二無量壽經二卷。漢代安昌國王大師。名清字世高所譯。沙門曇鸞注解。第二無量壽經三卷。魏世少帝芳嘉平年。天竺沙門高僧鑄。於洛陽白馬寺譯。與世高所出小異。第三無量壽淨平等覺經三卷或四卷。前魏高貴鄉公世甘露年中。長房錄云。帝甘露三年。西域沙門白延。於洛陽寺譯。與世高康僧鑄所出同本。文相少異。無量壽淨平等覺經。漢桓帝世。月氏國沙門支婁迦讖所譯。唐錄不云次第。房云初出。今案。應在第三出。同在漢明而世高後出。第四諸佛阿彌陀三昧佛隨喜佛種種過度人道經。一名無量壽經。吳世支國優婆塞支謙。黃武年中於武中於武昌譯。房錄云。魏文帝世。支謙出。與世高僧鑄所出少異。第五無量壽經一卷。亦名阿彌陀經。秦弘始四年二月八日。羅什出。與支謙僧鑄白延法護所出多卷少異。第六無量壽至真等正覺經。一名觀樂佛土經。東晉元熙元年中。沙門竺法護譯。與支謙僧鑄白延法護羅什等所出本同文異。第七新無量壽二卷。宋朝寶雲出。與支謙僧鑄白延法護羅什法護所出不同。見道東宋齊錄。又新無量壽經二卷。東晉安代世。北天竺三藏法師佛陀跋羅。永初二年中。於道場寺出。見齊唱錄。唐隋二錄不出次第。案。歷代記。永初。在宋武帝。非晉年號也。又無量壽經二卷。西晉月支沙門竺法護。永嘉二年譯。唐錄不出次第。房云。第四出。西晉竺法護。懷帝永嘉二年正月十一日譯。與支謙康僧鑄白延等出同本文異。(安養集十)

第八無量壽經。宋朝天竺三藏法師求那跋陀羅云功德賢。於孝健年中出。見道東宋齊錄。與二僧鑄支謙白延法護羅什法護等所出同本。文略略異。上來所引經有二十一本。皆同本異訳。此間一切經中唯有三本。余皆無也。今所収者。或云是竺法護所訳。今詳文相非法護。又未詳何訳。相伝云。此經曹植數筆。右衛門長魏時僧鑄所出。觀無量壽經一卷。又觀無量壽經此二本。出僧祐錄。並在先訳。無量壽觀經宋文帝世。西域沙門瞿曇耶舍宋云時祐。元嘉年中於京邑訳。房錄云。觀無量壽經二卷。在重寶。失訳。又觀無量壽經一卷。在漢錄失訳。阿彌陀經宋文帝世。天竺三藏法師求那跋陀羅。元嘉年中於揚都訳。亦名小無量壽經。無量壽經。後秦羅什。弘始年中訳。稱讚淨土弘授受經。唐世玄奘三蔵訳。右三經同本。無量壽經。羅什所出。不知是無量壽經類不。鼓音陀羅尼經。失訳(安養抄五・安養集十)

(2) (我聞如是) 翻者訳殊於義無殊、(大經鈔一)

(3) (一切大聖神通已達) 得小果已趣大菩提、故名大聖、(大經鈔一)

(4) (其名曰摩訶了不勝) 問餘四人中誰先得道、答曇無德得阿濕摩訶男二人、次得婆提婆敷後乃得也、(大經鈔一)

心是敬提、(大經鈔一) 心是婆頤、心是摩訶網、(大經鈔一) (大經鈔一)

(5) (普賢菩薩妙處菩薩) 一普賢妙德為二類、二慈氏等、賢劫菩薩為二類、三賢護等、十六正士為二類、四普思議等、十四菩薩為二類、並有二千三十三也、(中略) 智度論云、善守等、十六菩薩是居家菩薩闍婆羅居士菩薩、是王舍城旧人、名頤王子菩薩是毘耶離國人皇德長者菩薩、是瞻波國人、導師居士菩薩是舍衛國人、那羅達婆羅門菩薩是浮梯羅國人、水天優婆塞菩薩、且準此六餘存略也、(中略) 亦名通言菩薩。其他普通無不實言、故、(大經鈔一)

(6) (弘誓正法) 普曜經云、其兜率天有大天宮、名曰高幢、広長二千五百六十里、菩薩常生為諸天人、敷演經典、(大經鈔一)

(7) (捨彼天宮降神母胎) 將下生時先觀四事、一觀時分、謂此人寿八万乃至百歲時也、二觀处所、謂瞻部州中印度也、三觀種姓、謂刹帝利或波羅門、四觀依器、謂母胎藏寬博無失、如是觀已、告行道天、汝可(至)告觀率諸天、却後七日菩薩此沒可生印度施作佛事、行道天子歡喜通告、五百天子降下生願、至第七日、菩薩便与五百天子一時下生、皆為積種、助宣佛事、当知此說、積迦菩薩、若餘菩薩隨其所心、(中略) 依大般若第六分、諸天計常謂無墮落、為彼彼執示現無常捨三寿也、依毘婆沙從天來、時有神變故、若依人來無此事、故、又諸仏皆於二人中成仏能順彼、又人間即有三厭離心、故有三猛智、故、又為欲俱壞一夫機、故謂若在、天則人無住、若在、人則天可來故、(中略) 普曜經云、菩薩問天、我以何形而入母胎、或天答曰種種之形、或曰象形、或曰金翅鳥、時有梵天、名曰強威、象形第一、謂兔馬象俱度、水時象能尽底、声聞緣覺猶如兔馬、唯菩薩象達法水底、故現白象入母胎也、大衆部等亦同此說、有部不許、九十一劫捨傍生、故、然大乘中此皆不現於義無過、(大經鈔一)

(8) (從右隨生) 為化衆生離七遣上故、(大經鈔一)

(9) (現行七步) 引華嚴十事、彼第八云現七覺法相、故、(大經鈔一)

(10) (博綜通貫續經緯) 内外諸道異術也、(中略) 治国圖書識記也、(中略) 引本起經云、太子十七晝夜憂念未曾會歡娛、常念出家、父王聞、僕、太子云何日憂怖時一臣言太子已長宜當妻娶以廻其心、因挾二名女、小國之王善覺有女名曰裘夷、天下無双八國諸王為子求之、父王聞已即召善覺而求裘夷、善覺答言此女有母及諸群臣、國師禁士相議宜啓、善覺歸、國憂不飲食、時女問父何故不樂、父則答云諸王求汝我不許之、又曰淨王今求汝、我若不与者王即罰我、適与汝者諸王結怨、女云勿憂我却七日自出城門用勝強者、時父曰王王更憂念、太子未獲云何得勝、時女至門術士雲集、爾時太子即与憂陀離陀調達等五百人取於札栗射莖之真而出城門、時先調達撰三塞門

象、象即忽死、離陀牽之置於道側、次又太子卿、象城外、象蘇如、故、又復調達、三諸力士相撲無對、離陀、決達多勝、地心中悶絕、王告、離陀汝子、太子而於勝負、離陀答曰、兄如須弥、自知、太子云何勝負、辭而退、又為射決先安、鉄鼓、十里置、一至、王七鼓、調達射之徹、一中、二、次又離陀徹、二貫、三、爾時太子挽弓皆折、即告、機日、祖王有、弓今在王廟、汝可取來、二人膝養衆人不、拳、太子牽弓徹、七鉄鼓、至鉄岡山、因妻、裘夷、(大經鈔二)

(11) (諸魔下動苦六年) 於是菩薩坐沙羅樹下、諸天奉甘露、不、自餐、一麻一米、以續精氣、端座六年(中略)此若行事一切諸仏未必有、之、如、即出家夜行道、故無六年苦行、故八相中有、別立、(大經鈔二)

(12) (現五濁利隨順眾生) 人壽千歲已還是名濁世、千歲已上名非濁世、百歲已還名濁增、故文殊問經云、何命濁十歲衆生乃至千歲有長短、故知、此千歲已前非濁世也、百歲已上仏出世已後、出、故知百歲已下是濁增已上非濁增、(大經鈔一、拾遺抄上)

(13) (吉祥感緣義章序) 菩薩自念言、過去諸仏坐於草庵、成、最正覺、乃至於時、菩薩見路石、有、人名曰吉祥、菩薩謂吉祥所而謂之言、吾欲得、吉祥與我、吉祥歡喜奉、柔順、(拾遺抄中)

(14) (使魔知之魔事官廳) 又降魔事一切菩薩不必皆有、如、亦勒等、無降魔事、因宿世中行有、異、爾時化宜亦有、差別、故不、同也、(大經鈔二)

(15) (貫絲練縛所住安諦) 貫者通也、練者括也、縛者委也、練者精也、淨影云、綰習也、(大經鈔二)

(16) (諸根悅予姿色清淨) 將欲、宣說奇特之法、是故先現、非常相也、(大經鈔二)

(17) (承仏聖旨) 整眼以顯慈誠、(大經鈔二)

(18) (唯然大聖我心念言) 第一妙色功德相好無備、第二寂靜功德、根拔、惑、第三勝若智功德、出非世、第四正行功德、利、自他、行、第五威德功德、神通遊戲、以此等義、名得、三仏名、(大經鈔二)

(19) (如來以無尽大悲乃至難值難見) 叙曰、諸仏法身無色無形、所居淨土亦無方所、身無色形、故、增無、像而不現、土無方處、故、無所而不、在、無像、是曰、真身也、非、方非、離、方、乃名、真土也、所以反隱其真者不、壞、陰身、於、一毛孔、普見、三世如來、還熟其本者不、諸互礙、於、微塵、遍現、十方刹土、然則、仏道遠乎、廻心而即淨國隔乎、反、機而、是、以、群生、長、三、界、處、重、而、真、脫、永、沒、日、流、入、深、間、而、難、出、濁、惡、熾、然、痛、燒、煎、煎、形、疲、顛、於、欲、塵、識、昏、乱、於、愛、彼、纏、崇、仏、種、而、真、能、生、長、災、在、宝、方、而、弗、敢、受、用、非、天、指、方、引、接、塵、跡、訓、道、無、由、離、此、穢、界、託、彼、淨、域、上、欲、隨、其所、化、而、取、仏、土、或、東、或、西、有、雄、狂、彼、機、宜、而、現、仏、身、乍、乍、乍、妙、時、大、時、小、此、經、所、明、即是、阿、弥、陀、仏、一、方、之、所、現、也、創、建、瞻、目、則、四、十、八、願、具、足、成、就、終、標、妙、果、則、廿、九、德、田、滿、莊、嚴、淨、過、三、界、量、杳、空、際、無、衰、無、變、三、草、滿、其、處、不、寒、不、熱、四、時、不、改、其、節、所、押、使、遊、者、乃、聖、乃、賢、乃、實、乃、運、作、者、唯、能、一、得、往、生、入、正、聚、而、不、退、暫、恭、彼、流、真、勝、忍、而、証、果、浴、八、德、之、池、洗、塵、勞、而、淨、業、遊、七、覺、之、林、採、法、味、而、捨、神、納、至、樂、於、無、窮、雖、經

劫_二忘_一疲、極_二楽_一之称其在_レ茲乎、所以如来_レ啓_二此_二娑婆_一苦多_二楽_一少_一、觀_二彼_二安養_一易_レ往_二無_一人、念_二奇特_一法_二演_二九重_一之光、住_二無_二盡_一悲_二振_二人_一寢之響_一、慶喜致_二清淨_一陳_二欣淨_一之間、前_二逸多_一重盛_二啓_二厭穢_一之方_一、後_二沒_二雖_二復_二通顯_一二門_一、具_二說_二三淨_一為_レ主者無量寿故因名為、(安養集十)

Abstract

**Ŭijök's Commentary
on the *Sūtra of Immeasurable Life*:
Examining the Newly Found Manuscript**

MINAMI Hironobu

Postdoctoral Research Fellow, International College for Postgraduate Buddhist Studies

Within the Pure Land related religious scriptures stored at the Minobu collection (Yamanashi prefecture, Japan), there is a commentary on the *Sūtra of Immeasurable Life* 無量壽經 entitled *Muryangsugyong sulgi* 無量壽經述記 卷第一 (Japanese: *Muryōju-kyō Jukki Kan Dai'ichi*). Upon validating the contents it was determined to match the text entitled *Muryangsugyong sul(ūi)gi* 無量壽經述(義)記 which was written by the seventh century Silla monk Ŭijök 義寂. The said text is thought to be a late Heian period transcript and while recorded in various records the extant copy had not been verified. There was only a reconstructed version of the text compiled by Reichi Kasuga and Ryūkai Etani from quotes from such texts as Minamoto no Takakuni's 源隆國 (1004-1077) *Anyōshū* 安養集 and Ryōe Dōkō's 了慧道光 (1243-1330) *Muryōju-kyō Shō* 無量壽經鈔. Here I

will give thought to more reliable reconstruction given those parts which were incomplete in Etani's reconstructed version as well as introducing the Minobu collection's copy as a preliminary step.

Key Words: *Sutra of Immeasurable Life*, Uijok, *Muryangsugyong sulgi*, Minobu Bunko collection, Etani Ryuukai, Silla, Pure Land

2010년 5월 11일 투고

2010년 6월 7일 심사완료